

大阪琵琶同好会の忘年会

曆の上では十二月七日が大雪、北国などから豪雪の便りを聞き始めるのはこの頃からでいよいよ冬將軍の来訪である。一方十二月は一年を締めくくると忘年会やクリスマスパーティーなどで騒ぐことの多い月。同好会でも琵琶歌で不景気を吹飛ばそうと絃友石橋旭嶺君のあつて十八日夕刻からレストルハウス浜寺でカニすき料理の豪華な忘年会を催した。集まったのは川村幸三郎、柴田雪井、芦田英三、米原、島津、矢野旭信、辻旭城、石橋旭嶺、天津八千代各氏で、石童丸、矢野天の羽衣、辻五條橋、石橋、二〇三高地、天津。以上琵琶演奏の外扇舞、剣舞、日舞詩吟などで楽しんで来年のファンクの期待に込めることを約束し十時乾盃散会した。(辻記)

故大坪草二郎先生二十三回忌

琵琶歌「茨木」「戻り橋」「道成寺」その他数々の傑作を発表して錦心流や錦、筑前琵琶の人々が愛吟する馴染の深い大坪先生が逝かれて早くも二十三年を経過し、その法要が昨年十一月二十一日東京台東区鳥越の寿松院で御遺族の竹下翠風女史によって厳粛に営まれた近親の外信州、九州各地から文学の門弟たちが参列、また平井洲誠氏の献詠を始め短歌、詩吟、朗詠各部門の代表や琵琶会員たちが故人の霊を慰めるため献詠し、又静岡の森鶴翁、函館高橋蘇水氏等が献花された。尚近く諏訪湖畔に故人の歌碑が建立される。

薩摩琵琶晴風新年演奏会

一月九日(日)昼一時-四時半東京杉並区高円寺会館。祝曲羽衣-会主浅野晴風-吟祝賀の詞-菅野-櫻狩-藤沢-菅公-竹内-五條橋-菅野-掛合羅生門-中山、太田尾、諸遊

屋島の誉-岩崎龍風-湯江-本橋錦風-別れの盃-山崎典水-吟楓橋夜泊-望月啞江-枚方堤-山口豈水-雪晴れ-大関英子-修善寺物語-杉山雅俊-静-緒方晴舟-接待-高田豈水-掛合舟并慶-野口嶮水、福島脹水、山下晴風。

京都琵琶協会一月定期茶話会

年末からお正月にかけて零度という寒い日が続いたが、昨日今日は忘れたように風もやみ三月上旬のように和やかな一月九日(日)午後一時から本部平井氏宅で初顔合せの例会が開かれ伊吹正陽、馬場鴨水、戸田旭公、戸倉旭嶺、田中鵬水、梅原旭濤、矢吹旭美津、安住旭康、山岡旭清、牧南水、古谷寛水、荒木旭媛、木下皇水、鹿師旭富、水内煥水、峰口高昇、平井春嶺、植村真水、以上十八名が参集、まづ新年の御慶を交わし、君が代-山岡-金剛石-田中-羅生門(筑前)-戸田-同(錦心流)-牧-白虎隊-水内-母常盤-木下-春日野-馬場-威海衛-伊吹-新撰組-植村-別れの盃(上)-安住-同(下)-矢吹各会員が順演後平井御夫妻心尽くし御馳走に正月気分を満喫しながら盃を傾けつつ役員の改選(保留)一月三十日(日)昼一時から西大路駅前京みやこで新年宴会開催の件などを決定して七時半和氣あいあい裡に閉会解散した。

名流琵琶大会

一月二十八日(日)十一時東京日本橋三越劇場。若宮旭登、都錦穂、鈴木流泉、高田豈水、仲川秀邦、最上穂洲、古家絃風、水藤五郎、田中旭巖その他全国各流派名士演奏、二十四曲。(次号詳報)

告

○京都琵琶協会二月定期茶話会 二月十三日(日)昼一時会員矢吹旭美津女史宅。  
○浅野晴風氏ラヂオ放送 二月二十四日(木)NHK・FM夕五時「あゝ八甲田山」

とあ

今冬は近年稀な大雪で日本海側や東北、北海道など所により二米、三米と我々には想像もつかぬ積雪との報道があり是等地方の絃友同好諸氏に対しお見舞申上げる。京紘紙は毎月、十日頃に翌月号の編集を終って印刷に廻すので編集子は一ヶ月も先きの気候や雰囲気想像しながら筆を運ぶことになる。余寒厳しい時季に桜花爛漫の好季に浸り、残暑去りやらぬ時に既に爽秋の気持になつて筆を執らねばならぬ、従つて一般の人より一ヶ月早く齢をとる訳で思えば因果なことである。暮れから正月にかけてヤボ用が次ぎ次ぎと重なりお年賀状を頂戴しながら失礼してしまつた方々に対し誠に申訳なく思っている。お許し下さい。

昭和五十二年二月一日発行(非売品)  
編集者 植村真水  
発行所 高槻市津之江北町一ノ二番  
電話 〇七二六(七三三)六〇五一

琵琶 機関紙

京

紘

第二七二号 京 紘 社

薩摩琵琶とその周辺 (二)

鎮海湾の猛演練 三つの針路と東郷の決断 遥かに勝る敵 主砲力 敵我哨戒水域に入る 仮装巡洋艦信濃丸の活躍

東京 坂本 錦 道

五月十四日、夜陰に紛れてカムラン湾より忽然その姿を晦ましたバルチック艦隊は、果たして如何なる方向に針路をとっているか、思えば昨年十月、租国リパウの軍港を出て一万八千里の長丁場を一つの自国の根拠地もなく幾多の障害と闘い乍ら、今一息に露国最終の根拠地浦塩を指向する司令長官の口提督も、租国の興廃を双肩に負いその苦悩も察するに余りあるものである。

ロシアは頼みにする同盟国フランスであるが、これより先、フランスは局外中立を宣言したが、窺かにバ艦隊の援助の中立違反問題を各所に起して各国より強硬なる抗議を受け、我が国論の沸騰も高潮に達し激派はフランス何者ぞ、正に鞘を払わんとまで激昂した。さてこちら東郷艦隊は十二月から三十八年二月にかけて、総ての軍艦はドック入りして調整と兵員の休養を終って鎮海湾(韓国慶尚南道の南端日本海軍根拠地)に入り、一方浦塩

を遠巻きに封鎖、八雲、浅間、吾妻以下の艦艇を交替しつつ哨戒に当らせ、更に出羽中將の南遣支隊をしてバ艦隊の東航情報に当らせ、以外は全力を傾倒して臨戦訓練に当らせた。鎮海湾の訓練は日本海軍創始以来曾ってその類例を見ない激烈なもので軍艦、駆逐艦の砲撃を始めとし、特に水雷艇は魚雷発射に決死的演練を行っていた。五月に入つては湾内より激浪動揺の烈しき外海に於てその砲術は百発百中の確率を示し、東郷をして驚嘆せしめる妙境に達し、しばしば満点の賞を受けていた。この演練でいま一つ付け加えることは、夜間に於て敵艦を見る視力を養うために夜間訓練を一日も休まず続けた。人間の目も慣れると暗夜にもある程度見えるようになる。これは夜間の襲撃肉薄に最も重点を置いていた。冒頭に述べたバ艦隊の針路について、日本海軍首脳の間には三つの想定をもっていた、対島水道、津軽、宗谷の両海峡の何れかを通

る、然しこの三つのうち、こちらは対島にこだわって若しも津軽や宗谷に回航されては一大事である。我主力をこの方面に急航する時間のロス計算すれば、敵の半数を捕えても残余の半数は浦塩に逃してしまふ、各艦長や参謀を加えての軍議もただ想定するだけのもので、事実これは重大なる暗である。東郷は最後に「この鎮海で待つ」と断言された。会議はこれで終わったのである。

こんどはロシア側の考案の一つとして対島に於て決戦を交えれば、何れが勝つにしても両軍共に相当な損害を覚悟せねばならぬ、出来ればこれを避け太平洋に出て、小笠原を占領し東郷を太平洋に誘い、機を狙って浦塩に向うのが一番安全な方法としてロシアの海將の間で考えられていたが、然しこの案はハンプルク・アメリカン会社の給炭船の石炭が払底し(四月十六日)、到底太平洋迂回作戦は事実上不可能となつてしまつた。

こちら東郷艦隊はすでに哨戒海域を済洲島から佐世保を一線に正方形にとり、それを基盤目の如く二十数区画とし、パトロール艦船七十三隻を配して蟻の這い出る隙間もなく、敵よ御参なれという哨戒の嚴重なる態勢である。一大決戦を前にした五月二十六日、バ艦隊は上海附近の舟山群島の前面に現れた。ところが提督は遠かに全艦隊の速力を五ノットに減じ戦闘訓練を三回も繰り返した、兵員は長官の頭の異常を疑つた程である。提督はこ

の訓練には一つの固い信念があった。それは海戦を予想する沖の島附近を午後二時から三時に通過して、主力の砲戦を交え乍ら夜陰に乗じて一遽に浦塩に入る作戦で、それをやるに於ては時間が早すぎ、このまゝ速力をとれば夜間対島水道の入口に於て、東郷の得意とする水雷攻撃を受け重大なる損害を受けるは必至と判断し、時間稼ぎの演習をやっていたと思われ。こんな状況下に提督は断乎対島海峡通過を決意した。奇しくも日露海軍提督の決断はこの対島に合致したのである。二十日六日旗艦スワロフの橋頭に「我艦隊は之より日本海に入らんとす、各員決死奮闘之に當り以て名譽の戦勝者たれ」の信号を掲げた、三十八隻より成れる一大敵艦隊は蜿蜒長蛇の如く軸艦相ふくんで、いよいよ我長崎の鼻先にある五島列島と済洲島の間を差しかつた。玆で参考のため両艦隊主砲の比較である。

十二吋砲	十吋砲	九吋砲	八吋砲	計
日本	一六	一	〇	三〇
露国	二六	一五	四	四八

主砲は日本の倍に近い偉力がありそれだけ艦隊には分があった。加えてバ艦隊の第一戦隊は新造したばかりの四大戦艦を有し、何れも一万三千トン、十八ノット、十二吋砲各四門宛、主要装備十四吋という、三笠より数等優秀なるものである。

さて幸か不幸か二十六日の夕方よりこの海域に濃霧が襲来、バ艦隊側はこの咫尺を弁せぬ濃霧では東郷に見つかる筈もなしと、之を

神の恵みとして歓声をあげていた。然しいよ東郷の哨戒水域に入った実感を味わい乍ら全艦隊は消灯して粛々と北東に針路をとる。九匁の功を一貫に欠くという事があるが、この艦隊の最後部に在った病院艦アリヨールは、この濃霧ではと安心したものか不用意にも点火したまゝ航行していたのが、我パトロール中の仮装巡洋艦信濃丸に見付かってしまった。艦長成川大佐は怪しと見て左舷に接近して見ると、一門の大砲もなく明かに病院船と確認、同時にこの附近に主力が併航しているのは疑いなく前後左右に注目すれば、左舷千メートルの近距離に十数隻が数條の煙の尾を引きつゝあるを確認する。時に五月二十七日午前四時三十分、直ちに本隊に向つて「敵の艦隊二〇三隻を北上中」と発信。これより東郷艦隊の無電は愈々頻繁となり、バ艦隊側はかねて東郷の電信記号もある程度のスパイせる記録と照合しても全々急変して複雑なる記録で判読も想像もつかぬもので、提督はイグナチウス艦長を顧みて「東郷は遂に我々を見付けた」と語り乍ら、さらば祖国の名譽をかけて断乎決戦のほぞを固めた。(以下次号)



続・私の音楽ノート(一)

芸 水藤 五郎

ゆく年、くる年が繰り返されて、自然に年を経てゆくのでしようが、一口に八十年と云っても、それが人生となると大変な重味に感じられます。その八十年余を一芸の探求にあて、ゆくとしたら、未だその道十年に足らない私から見ると、神様の如くに思えます。

私は日頃、八十才以上の方を偉人と見ていますが、更に芸にたずさわるとなると余計で、偉の上に大をつけたくなる思いがします。則ち大偉人です。この感に打たれるのは、伝統芸能にかゝりを持ち自分には多機あることですが、七十一年秋はその感が一層強かったのです。先年亡くなった故水藤水翁も八十才とは思えぬバイタリティでした。急逝であつただけに老を感じることなく、いや、感じさせることなく居ましたが、やはり死は現事となりました。力強く、堂々として人と接していた人だけに、その病の襲撃には一面もろかつたとも云えます。一病云々の故事があります成程と思ひ当りました。

それを裏付ける様な話。その人々に心を打たれたのが昨秋でした。十月二十九日の国立自主公演「琵琶」での辻靖剛翁の演奏がそれ

でありました。常には、心臓の危険を含んでいながら、子弟の育成と諸会の世話をなされる老師ではありませんが、その健康は決して厳強な性ではない様です。絶えずに体の故障を訴えられるのですから、本来は老弱な方なのでしょう。しかし、その高令ながらも毎朝琵琶の演奏の稽古をつづけている生活信条には敬服するものであります。

萩江節の五世宗家露友師が、八十才を越す高令であり乍ら、まだまだ立派な演奏をつづけている秘訣を、毎日の発声練習の効と云っているのを師の対談の中で聞きました。調、平凡とも思えるこの繰返しが、その夜の演奏の支えとなっていたのでしよう。単々として、静かな悠容せまらぬ弾奏には、技量の優劣以上のものを感じました。それは枯れた美でした。

その夜の辻師は、秋冷を防ぐ可く、毛布を持参しての楽屋入りとのことでした。日頃、琵琶楽協会の事務所を兼ねる師の執務所を訪ねる時、私は、耳に補聴器をあて乍ら、子弟に弾法を教える師の姿に接します。その折、師の姿に、そして態度には適度な弱さがあるのです。この弱さに、私たち来訪者や周囲の人々は、師の高令であることを自覚し、無理のない様にと努めます。若々しく、力強く、堂々と振舞う故枝水翁には、この「適なる弱さ」がなかった様な気がします。この差が今日の辻師の長寿を支えているのではと思ひました。

私の亡母錦嬢にも、故枝水翁と同じことが云えました。病への恐れ、身体不安を心に抱き乍らも、それが現事にならない限り避けていた様でした。それが運命であつたのですから、死の時期に付いて、故人の責任は無いのですが、それに到る迄の身体管理は、特に亡母について云えば、下手でありました。弱くあることが強にもなる場合があるのですから、この適なる弱さ、無理のなさが大切でした。

昨年十一月九日、十九日の二回、新内の岡本文弥師にお会いしました。師の年令は辻師と同様、八十才を越えるものであります。が、その芸への闘志は若々しくさえありました。ただ、それは静かな、単々とした中に秘められてあります。表面は柔かい絹であり、芯に針金が入っている様に思えました。長年の風雪に耐えた芸の姿です。その一見、弱々しくさえ見える師の姿、その哀調をこめた新内、それは適な弱さを持った、真の強さに通じる老巧な境地でありました。

私はこの古波に接し、今更乍ら人生の重味に接した感じがしました。そして、師が私のラジオ演奏に対して与えて下さった評を思い起こしました。それは、昨秋の「伊達政宗」について記されたもので、次の様に書かれていました。「若さ溢れた熱演に拍手を送り、更に味わい深い演奏になることを期待します」この一行がなんと重みのある教えであつたのかを今更乍ら感じたのであります。勿論、

三十足らずの私が「適なる弱さ」味わい等を求めることは出来ませんし、今はその必要もないのですが、二十年、三十年の後に、もし幸いに芸に遊ぶ自分であつたなら、この両師の範にならいたいと思つて居るのです。そして、それが出来た時、故枝水翁や、亡母にない一面を得るわけで、錦の存続にもつながるのかもしれない。

(続く)

よい歌手発見の報に、札幌では大いに喜び太田副支社長自ら馳せ来て、未だ十七才の当人と懇談の結果、両親共々承認済みで、直接交渉など必要なしと、しきりに力説する彼女の言を入れ、両親への挨拶をあと廻しにした事が、やがて大失態を招く因となる、なぞとはつゆ知らず、いよいよ札幌上映の当日、私は彼女をつれて出発することとなった。

ところで、小樽の駅員に逢いたくないと云う彼女の意に従い、一つ手前の色内駅から乗車し行先も札幌の次の苗穂駅にしてと云うのだったが、それは金物屋の娘が得意先の小樽駅員に見られたくないのと、苗穂には伯父の家があり、其処へ泊ることにしてあるからというのだった、しかし汽車が札幌についた途

わが道を行く

六十五年(四六)

西郷 天 風



端、松竹キネマ支社に立寄ることを思い立ち、私のあとについて来たのも好都合だった。

支社では既に宿舎を用意しており、挨拶に立寄ったのを幸いに「水藻の花」の試写を行ったところ、歌手の試演を聞いた一同はその芸のすばらしさに一驚を喫した、そこで「当地出身の、本職も及ばぬ名歌手出演」と本名を秘しての宣伝がいよいよ功を奏し、観客も亦その芸の美事に魅了され、二日目より三日目へと超満員の盛況に、副支社長太田氏の如き、私財を投じて祝宴を張るといふところ迄はよかつたが、四日目の朝だった。松竹キネマ支社特約の宿舎に一人の若い警官が歌手千代子を訪ねて来た、取次ぎに出た私は、てっきり彼女のフレンドと思ひ、その警官には笑を残しながら二階に馳せ上り、彼女に來客を告げれば「そんな人は知らぬ、断つて」と云いながらやや狼狽の色が見られた。

警官は別に何の気色も見せず、私に当人をつれて本署迄来て貰いたい、間違ひなく、と念を押して帰っていった、此時になつて初めて、これは只ならぬ問題があると察した私は、敵として聞き入れぬ彼女を説いて本署へ出頭して見れば、それは正に晴天の霹靂、小樽から母親が引取に来るから、君もそれまで待つようにと一室に案内され、親子丼などのもてなしを受けて待つことになった。

やがて署員の話によつて、彼女は家人に無断で出て来たものであり、苗穂の親類から電話で問合せがあったので先程署員が確かめに

行った訳だが、幸い母親も君とがめる意志がなかつたからよいが、と笑い乍ら、うかつな事をすると誘ひに罪に問われるところだった。署でもこのことは当人が歌手として出演したかつた為と認めるから、君はそのまま帰つてよろしい。

さあそれからが大変だった、又しても副支社長と協力して俄かに歌手探しである、尤も今度は、先日渡りをつけておいた数人の中から、さる商家の令嬢と、或る医院の看護婦などに白羽の矢を立て、どうやら「水藻の花」は終始好評裡に終つた。之で散々気をもみつけた数日の疲労も忘れることを得た私は、当時起居していた旭川の錦座三階に帰つた。

さて、久しぶりで戻つて見れば、第一目についたのが錦座の絵看板だった。見馴れぬ画風がまことに美事、しかも垢抜けしてある。書き終つた処で片付け乍らの話によれば、彼は旭川市産の高橋北修君、早くより画家を志して上京し、美術の森上野公園前で看板等の仕事をしながら勉強中とのことだったが、この大地震では、驚きの余り取るものも取あえず空腹を抱えて上野公園から上野駅へと、人波にもまれ乍ら折よく東北本線の列車へ乗込むことが出来たのは洵に幸運だった。中には列車の屋根に乗る者もある始末で、正に命からがらの状態だった。幸い同行の弟子一人が何くれとなく飛びまわり、漸く空腹を満した頃着いた駅で何か異様な騒々しさを感じたのも夢心地だった。かくて程なく石の巻駅に

寒中御見舞

ものがたり 雅俊 琵琶

雅俊 杉山旗水

〒177 東京都練馬区石神井台四ノ五 都宮石神井住宅団地一〇一五〇二 電話 〇三(九二八)四〇一三番

ついた時列車内の動揺只ならず、やがて全乗客下車することとなり、列車を背にして整理すれば、不逞鮮人が一人この列車で逃亡をはかり、潜伏してあるので大捜査となつたのであった、ところで、人並はずれた背の高い北修君の風采と「ドモリ」が「棍棒に鉢巻」という物々しい姿の一同から不逞鮮人の一味と誤認されたとは露知らず、けわしい眼差で迫り来るその目標が彼自身にあると気づいた時驚いて辨明に努めれば努める程「ドモリ」は激しさを増すばかり、相手はいよいよ棍棒を構えて容易ならぬ状況に立至つた。それと見るや彼の弟子が恐る恐る両者の間に立つて、北修氏の身分説明につとめた結果、さし迫つた空気が一応和らぎ、日本人なら歌でも歌わ

せてみる」と云う誰かの叫びによつて、衆人環視の中でハトポツポツやお手々つないでなど唄わせられ、危うく棍棒の難を逃れたと面白おかしく物語るなかに、彼の人となりがにじみ出て不知不識のうちに意気投合、数日後には詩人の小熊秀雄、建築の坂野多賀春両氏を加えて都合四名が中心となり、人口七万足らずの小都市に裸婦のモデルを擁する絵画研究所創立となった。それは大正十二年、かの関東大震災三ヶ月後の十二月だった。

賤ヶ岳七本槍余話

辻 旭 城



天正十年(一五八二)六月十三日、夜が未だ明けきらない中を、強雨をついて池田恒興父子は五百余の軍勢をひきつれ、光秀を討ちとるべく摂津の国山崎めざして進軍した。

山崎の宝寺附近は合戦の中心地となつた。激戦は夕方ごろまで続き、光秀軍は全く敗退して、光秀は再起をはかるべく逃げる途中、京の伏見小栗栖村で土民のために殺された。

光秀滅亡の後、秀吉はひそかに天下を取ろうとしていた。その凱旋祝と今後の政策についての軍議が、故信長の幕臣多数を集めて清州の城で開かれた。

柴田勝家はこれを快からず思っていた。この会議で秀吉と勝家とが、やがて戦う日が来るべきを互いに胸に描いて別れたのである。これが後世日本の歴史を飾る賤ヶ岳の戦いで、天正十一年四月半ば、湖北の山野には軍馬の姿が激しく動き始めた。

花吹雪が天主閣の屋根にふりそそいでいた。越前北の庄の福井城主佐久間盛政は、甥の柴田勝家から秀吉攻撃のため応援の依頼を受け、三百有余の兵を率いて中河内方面に向つた。この時秀吉は光秀の居城龜山を占領して守備していたが、これを聞かぬや直ちに少数の部下を残し、自らは大軍を引きつれて江州木之本城に帰つてきた。

ところが勝家出兵の報を聞かぬや、美濃の国岐阜城にあった織田信長の三男信孝は、父信長が京都本能寺の露と消えたあと、遺業を継いで天下は自分のものと思つていたので、清州での後継会議でこれを発表したため、秀吉は怒りとふんまんの日々を送っていた。

戦機熟すと雀躍した信孝は、信長恩顧の將兵を集めて秀吉と一戦を交える決心をしたが、このこと有るを予知していた秀吉は、天正十一年三月部下の精銳多数を余吾湖のほとりに送つて堅固な陣地を敷き、自分は木之本城を合弟小一郎に預け、自らは將兵三万を率いて美濃岐阜の信孝を攻めるべく軍馬を走らせた。

これより先、摂津の国高槻城主高山右近と中川清秀は、共に美濃口を備えていたが、秀吉の命により余吾湖畔に陣する部隊の予備隊

として到着、右近は岩崎山を、清秀は大岩山を守つた。しかも到着したばかりで未だ陣地が完成しないうちに戦いが始まつた。それは曾つて秀吉の部下であつた山路將監が、柴田勝家に秀吉方の陣備えを全部内通し、右近、清秀の陣地未完成の虚を衝くことを奨めた。特に中川清秀は有名な短気者で、攻められたら戦術の駆け引きなど考えずに必ず討つて出るに相違ないから、之を討取つて陣地を焼き払えば、右近軍は乱れると教えた。

秀吉の岐阜城襲撃を知つた佐久間盛政は、勝家を援けて中河内方面から四月二十日未明多数の軍勢を以て断崖絶壁を踏破、余吾湖西岸から清秀と右近が布陣する尾崎附近の壘に奇襲をかけた。

霧の深い朝であつた、清秀の馬卒数名が、疲れている軍馬に水を与えるため湖に來たと霧の動く中から突然玄蕃の精銳数名が現われて、馬卒二、三名が血祭りにあげられた。残りの者は命からがら漸く本隊に駆け戻つて急を告げた。それによると敵の数は約一万五千といふ。一方、右近側は二千余名で未完成の陣地を守つていた。

この報告を聞いた作戦上手の右近は、ここで戦うのは不利で、寧ろ一旦退いて敵軍の裏をかく戦術が上策と考え、清秀にこの案を勧めたが肯んぜず、再度の右近の勧誘には右近を憶病者と罵りながら、清秀は無理な合戦を始めた。手兵千余名をもって大岩山を駆け下り敵の大軍と戦つたが衆寡敵せず、遂に余吾

湖畔で討死にした。

味方の急報に接した秀吉はその日の午後、将兵多数を従えて木之本城に戻り、夜半に城を発ち賤ヶ岳に登って明け方、敵陣めがけて矢玉を雨霰と打ち込んだ。このとき盛政方は前夜から戦勝の祝宴を張り、将兵たちは酔いつぶれていた。不意をうたれた盛政勢があわてふためいているところへ、愛馬に鞭打ち槍をふるって突入したのが加藤嘉明、加藤清正、糟屋武則、平野長泰、脇坂安治、石川一光、片桐且元の七勇士である。

このうち石川一光はこの合戦で華々しく討死したが、残る六人の豪傑は盛政勢を追い、柳ヶ瀬の陣営を捨て、落ち行く柴田勢に襲いかかった。

勝家の忠臣毛受勝介は柴田の旗を押立て、「我こそは柴田勝家なり」と叫んで防戦する内、勝家は辛うじて福井城に逃れたが、秀吉軍の急追撃で柴田勢に味方した越前府中城主前田利家は降参し、勝家も遂に城に火を放って自決した。

これが世に知られた天下分け目の「賤ヶ岳合戦」で、この一戦こそ秀吉の勢力を決定的に基礎づけたものであり、この合戦に奮戦した槍の七勇士が有名な「賤ヶ岳七本槍」である。俳風柳多留第三十五編

七本の中に二本は蛇の目なり 楽志

同 第五十八編

七本でつつきちらすしづがだけ 秀吉は凱歌を奏して意気揚々と長浜城へ引あげた。長浜の繁栄は秀吉の勢力安定と共に目覚ましくなったが、天下が徳川氏の手に移ると城は廃城となった。

若者たち和楽器に情熱

新しい音の未来求めて



琵琶、尺八、三味線、笙、琴……。高齢者の趣味、でなければ娘さんのおけいこと、と思われがちだが、これらの和楽器が最近、青年たちの不思議な情熱を集めている。十八才の三味線のお師匠さん、ロックミュージックとの合奏をめざす琵琶奏者。洋楽器で和楽器の音色を出そうと試みるギタリストもいる。大阪府下のそんな若者たちが新年早々、内輪で第一回の合同コンサートを開くことになった。「五線譜に閉じ込められた西洋音楽ばかりが音楽やない。和楽器の中にこそ新しい音の未来がある」。音を追求する若者たちがたどった道は、この国に脈々と伝わる古風で素朴な楽譜への回帰だった。

コンサートを招集するのは池田市姫室町に住むギタリスト青木さん。三十二才。年末、川西市内の小さなホールでリサイタルを開いた。クラシック曲を中心にいくつか弾いたあと、突然飛び出したのが琴の「六段」の調べ。普通はミ音に調律してあるギターの第六弦をレ音に下げたら、とたんに典雅な琴のタッチに早変わり。続けて同じ技法で自作の曲「古

都」を弾き終えるとひとときわ高い拍手。

ギターの外にもピアノ、チェンバロと巾広くこなす青木さんの心に二年ほど前のある日ふと一つの「音」がわいた。三才の時に祖母から手ほどきを受けた三味線の響きだった。「新しい音の手がかりは和楽器だ」。まづ琵琶を買って込んで手習いの道に。得意のギターは琴に応用してみた。去年七月、池田の画廊で開いた自分のギターコンサートには琵琶の老達人や三味線の師匠をゲストに招いた。新しい試みを繰り返すうち、和楽器を志す若者がたくさんいることを知るようになった。

住吉区手塚山東の堀内さん(28)は、雅楽の笙を吹き始めて一年だった。四天王寺に伝わる「雅亮会」の練習生。烏帽子に直垂の装束で舞台に上ったこともある。笙は十七本束ねた竹管を指で操作して何種類かの和音を出す。呼吸と吸気の繰り返して、演奏中全く音に休みを入れないのが特徴だ。「これをやる」とまづ音の発見の驚きがある。そのうちにいんな音のみがみな面白くなる。ヨーロッパの中世音楽に興味を持ち次第に日本の古代音楽に傾いて行った。

旭区中宮五丁目金寄泰二さん(25)はピアノひげに羽織袴で薩摩琵琶を弾く。号は清水中学生のころ映画で聞いた「耳なし芳一」の琵琶に心をひかれた。高校を出るまでは人並みにフォークギターやエレキを。浪人中に家の近くで琵琶の演奏会が開かれたのを機会に入門した。「祭りの笛や太鼓にはくまされた

土着的な音への美意識がだれにもひそんでいることがわかって来た」。西郷隆盛にまつわる「城山」とか「白虎隊」などの古めかしい語りを、どのように自分のものとしてこなすかに苦闘している。

池田市天神一丁目久保俊広さん(18)は、七人の弟子を持つ三味線の師匠。中学二年のとき、近所から流れてきた三味線の音を聞いて病みつきになり、すぐこの道に飛び込んだ。ギターに合わせて「ジョンガラ節」「ソーラン節」などの民謡やモダンフォークを演奏したり、パンジョーのタッチでフォスターの「おお、スザンナ」を弾いたり、三味線の現代風アレンジにも意欲的。

そんな若者たちが十人、年の瀬のある日、めいめい楽器を持って青木さん方に集まった。思い思いに楽器を鳴らしていると、応接間は小さなコンサートホールのふん囲気。話はずみ出した。「和楽器の音が、どうしてこれほど忘れられてきたのやろう」「西洋音楽一辺倒の風潮のせいかな」「五線譜の十二音にはめこまれた楽器に比べ、和楽器は幅が広いし、即興性にも富んでいるのに」「案外楽器メーカーのピアノ販売政策で日本の音楽が規定されたのと同じか」「怪くらもつとがんばらなあかん」……。

ともかくも一月から合同の演奏活動に力を入れて行くことに話がまとまった。一回目は青木さん宅で。形式はこれから決める。いまのところ、ロックの合奏も一つのプランだ。

連帯の機会をつかんだ若い音楽家たちが、新春を迎えてどんな夢を広げることか。(五十二年一月一日附朝日新聞から転載) 琵琶二、三味線一、琴一、尺八一、笙一その他合計十八合奏の円座写真は省略)

光悦愛用の逸品

一会社々長のコレクション

京都信金支店で「琵琶展」

八百五十年前の逸品から手作りまで五十張をそろえた「琵琶展」が五日から下京区の京都信用金庫西大路支店ロビーで開かれる。

琵琶は奈良時代、中国から輸入された東洋の弦楽器の一つで古くから宮廷や武士たちに愛用されてきた。琵琶展を開いたのは同区七條御所ノ内本町染色スクリーン製造会社々長田中久之助(鵬水)(67)さん。学生時代から筑前琵琶をたしなみ、琵琶への愛着はひとしお。十年前、外国人たちによって名器が海外へ持ち出されることを知り「これではいけない」とコレクションを始めた。京都を中心に

に全国も廻って蒐収した数は百五十張にも。その内五十張を銀行の頼みで展示した。旧久邇宮邸から出た八百五十年前の作といわれる楽琵琶をはじめ本阿弥光悦の名前が入っている四百年前の盲僧琵琶など逸品揃い。田中さん自作の筑前琵琶や珍しい月琵琶も並んでいる



る。ロビーで展示準備をする田中さんは「伝統楽器を守るといふ気持ちで始めたが、蒐集数は恐らく日本一でしょう、全部でいくらの値になるやら見当もつきません」と話していた。十五日まで。(一月五日京都新聞所載) 琵琶五十面展示の写真は省略)

義士祭演奏会

十一月十二日(日)昼一時京都東山安井金比羅宮会館、主催京都琵琶協会。師走半ばというのに暖かな小春日和で聴客も早やばやと来場して満員の盛況を呈し会場係は整理に嬉しい悲鳴を挙げていた。風邪などで三人が休演し些か淋しい感があったがプログラムの構成は事件発生の順序を主眼とし中山安兵衛高田馬場の仇討ちから義士討入本懐までを左記の通り順演し聴衆に満足を与えて五時終演、引き続き関係者の外常連聴客数氏を招待して乾盃、六時半成功裡に本日の演奏会を終って解散した。高田の馬場：山岡旭清、松の廊下：馬場鴨水、掛合田村邸：田中鵬水、矢吹旭美津、名残りの桜：植村真水、義人天野屋：平井春嶺、山科の別れ：牧南水、大高源吾：荒木旭媛、間重次郎の妻：梅原旭濤、名残りの緒琴：若宮旭登、大石主税：戸田旭公、雪晴れ：木下皇水。

名曲お好み邦楽選「忠臣蔵」

討入り前夜という十二月十三日(日)晚八時NHK第一ラジオ(構成若林一郎、解説渡辺文子アナウンサー)。琵琶、清元、小唄で赤穂義士関係の放送があり琵琶は原島旭姓女史が筑前琵琶「義士本懐」(約二十分)で有終の美を飾った。